

研究ノート

近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワーク

—エティエンヌ・ロジェ（一六六五／六六一七—二二）の書籍・楽譜出版活動を中心に

七 條 めぐみ

一、はじめに

一六世紀後半にスペインからの独立を果たした北部ネーデルラント、通称オランダは、海運力を武器にヨーロッパの貿易を牽引する連邦国家として急成長し、一七世紀にいわゆる「黄金時代」を迎えた。この時期にオランダで発展した産業では繊維業や織物業がよく知られるが、同時に出版業も目覚ましい発展を遂げている。

ヨーロッパの出版史において、印刷技術の誕生とカトリック系の書物の普及により発展をつづけた一五、一六世紀に比べ、一七世紀は低迷の時代と捉えられている。それは、宗教改革によるカトリック系の書物とラテン語の相対

的地位の低下、長引く宗教戦争による物流の混乱、それに伴う大陸各国の経済不況などによって説明される。しかしその中で、オランダは異彩を放つと言える。この地域では、一六世紀南ネーデルラントの大出版者プラントンの偉業を受け継ぎながら、世紀の後半にはプロテスタント系の書物を発行するライデンのエルゼヴィール家、一七世紀には地図を専門とするアムステルダムのプロウが登場した。このようなオランダの台頭に関して、一般的な出版史では経済発展によって印刷業や書物の取引が盛んになったこと、あるいは国民の大半がカルヴァン派であるために、プロテスタント知識人や出版者の受け入れが進んだことが理由とされてきた「フェーヴル、マルタン、四四—四六頁」。しか

し、出版業の発展を、商人たちの「自由を愛し、技芸と精神の所産を尊重する」[「フェーヴル、マルタン、四四頁」] 姿勢によって説明するのみでは、オランダの出版者がどのような条件のもとで活動を行っていたのかが十分に明らかになっていないと言える。同時に、一七世紀オランダは書籍出版だけでなく楽譜出版においても、ヨーロッパの中心地へと急成長した。このことは、楽譜出版の技術的移行期において、新しい彫版印刷の技術がオランダでいち早く浸透したことによって説明されるが、そのような変化がなぜ他の地域に先んじて起こったのかという問いは、いまだ投げかけられていない。²⁾そして筆者が考えるに、この時代のオランダの出版業をより正確に理解するためには、まさにこの書籍出版と楽譜出版の双方を射程に入れて考察することが必要である。というのも、両者はともに出版文化の一部を構成し、さまざまな条件や人的資源を共有していたのである。

また、一七世紀オランダの経済発展に関しては、しばしばユグノーによる貢献が話題となる。フランスで迫害を受けたユグノー難民の中には、職人や手工業者が少なからず含まれ、彼らがフランスの技術を避難先にもたらすことで、繊維業や織物業を中心にさまざまな分野での技術移転が起こった。この点に関してはスコヴィルや金によって経

済史の観点から研究が行われてきた「Scoville 1960」、金一九九四」。また、宗教文化史の観点では、プロテスタントが築いた国際的なネットワークの存在が、ユグノー研究において共有されている。国内では深沢によって、ユグノーのネットワークが国際的な商業空間の形成にどのように関わったかが論じられるほか、西川によってイングリランド国教会がプロテスタント国際主義の構築にどのような働きかけをしたのかが明らかになった「深沢一九九九、西川二〇〇六」。しかし、このような国民国家の枠を超える人の動きと、出版業との連動を問う研究は十分に行われていないと言え、ユグノーのネットワークがオランダの出版業の中でどのように機能したのかを考える必要がある。

したがって本稿では、オランダの出版者たちが有していた人的紐帯、とりわけユグノーの国際的なネットワークに注目し、そのようなネットワークがオランダの出版文化全体においてどのような機能を果たしたのかを明らかにすることを目的とする。この問題を扱う切り口として、本稿では一七〇〇年前後のアムステルダムで活動したエティエンヌ・ロジエ (Estienne Roger 一六六五/六六一七-二二) による書籍・楽譜出版を取り上げる。ロジエはノルマンディー出身のユグノーであり、一六八五年のナントの勅令廃止を受けてアムステルダムへ亡命した。彼は第一に、コ

レトリやヴィヴァルディなどイタリアの器楽作品の出版者として知られ、また楽譜出版史においては、彫版印刷技術の黎明期に国際規模での楽譜出版を行い、アムステルダムをロンドンに比肩する出版拠点とならしめた立役者としても位置づけられている³⁾。ただし、ロジェのこのような活動の特徴が、彼の出自やアムステルダムの出版事情と関連付けられて論じられることはなかった。一方、ロジェは楽譜出版と同時に書籍出版も行っていたが、書籍出版者としてはほとんど無名の存在である。そればかりか、オランダの出版業を扱う研究全般においても、書籍と楽譜の双方におけるネットワークの共有が考察の対象となることは少ない。このような問題意識から、本稿ではロジェと関わりのあった書籍商による書簡、新聞広告の分析を通して、ロジェと書籍商との協力関係を明らかにし、近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワークの有用性を検討する。

二、近世ヨーロッパにおけるユグノーの国際ネットワーク

ロジェの書籍・楽譜出版者としての活動を具体的に見ていく前に、本章では近世ヨーロッパにおいてユグノーが置かれていた状況について、彼らが築いた国際的なネットワークとアムステルダムにおけるユグノーの受け入れを中

心に整理する。その上で、アムステルダムの出版環境を概観し、他の地域と比較してどのような特色を有していたかを論じる。

二一、亡命ユグノーによる国際ネットワークの形成

一六世紀の宗教改革は、キリスト教会内部の対立から世俗権力を巻き込んだ争いへと発展し、ヨーロッパをローマ・カトリック勢力とプロテスタント勢力に二分する熾烈な宗教戦争へと導いた。一六四八年のウェストファリア条約で三十年戦争が終結した後も、ヨーロッパ各地で暴力ともなう対立が頻発した。それはしばしば、プロテスタント諸派に対する迫害や弾圧となって現れ、フランスでは「改革派教会」に所属する、いわゆるユグノーたちがその標的となった。とりわけ一六一〇年のアンリ四世の暗殺とルイ一三世の即位以降、ユグノーに対する締め付けが強化され、多数のユグノーがオランダへ逃亡した。さらに、一六六一年のルイ一四世の親政開始とともに、ユグノーの信仰や経済活動を制限する法令が定められ、一六八一年からの竜騎兵宿営（ドラゴナード）、そして一六八五年のナントの勅令廃止につながった。これにより、ユグノーは改宗するか奴隷船送りになるか、規則を破って亡命するかを選ばなければならなかった。このときに亡命した総数は

二〇万人と推定され、これは当時のフランス国内にいたユグノー人口（八五万人）の二四％に相当すると言われる。「深沢一九九、一九五頁」。この時彼らの命運を左右したのは、生命の保護と経済的援助を見込める人的ネットワークの存在だった。

このような事態を受けプロテスタント陣営では、スイス、オランダ、イングランドを中心にユグノーの亡命を助けようとする国際的な機運が高まった。西川によると、たとえばオランダ・ジュネーヴが仮の避難所を用意し、イングランドとオランダがフランス当局やサヴォワ公に働きかけて移動ルートを確保した。避難民の受け入れ場所としてはブランドンブルク・プロイセンが選ばれ、その移動費用にはジュネーヴ商人やイングランドのアン女王による義捐金が充てられたという（「西川二〇〇二、二一九頁」）。

一方で、深沢が着目しているように、各地に離散したユグノーは国家や教会を頼るだけでなく、みずから国際商業のネットワークを形成するにいたった。深沢は宗教的少数派のディアスポラ（離散）には国際商業との親和性があるとして、その要因は亡命者のコロニーを結びつける家族と同宗者間の連帯だとした（「深沢一九九、一八七頁」。つまり、当時の会社が家族を母体に形成され、婚姻がそれを補

完していたために、血縁関係の有無が商業を成功させる鍵となったのである。またプロテスタントの間では共通の信仰にもとづく絆も強く、フランス改革派教会とネーデルラント・ワロン教会の間では親密な関係が築かれたほか、ユグノーの商人とオランダやドイツの商人の姻戚関係も積極的に結ばれた。このような連携により、ユグノーは国際的な商業を行えるだけのネットワークを築くことに成功し、その後の植民地貿易の発展にも寄与したと言われる（「深沢一九九、二〇〇頁」）。

以上のように、フランスから脱出しようとするユグノーは、聖職者やエリート層におけるプロテスタント国際主義的な連帯に助けられ、また彼ら自身も血縁を母体とする商人のつながりを背景に独自のネットワークを形成した。

二二、アムステルダムでのユグノー

一七世紀のオランダは、ユグノーだけでなく、カトリックの過激派と目されるヤンセン派、イングランドのピューリタン、ポーランドのソツツイーニ派、スペインの改宗ユダヤ人（セファルディム）など、さまざまな宗教避難民の逃亡先となっていた（「ウォーラー・ステイン一九九三、六九頁」。オランダ政府はこのような亡命者の中でも、カルヴァン派の信仰を共有する宗教的親和性と、プロテスタント国

際主義の追い風を受けたユグノーに対し、積極的に移住の支援を行った。一六八一年五月、すなわち最初のドラゴナーズの直後、オランダ北部のフリースラント州は、すべての亡命者にオランダ人とまったく同じ権利を与えることを定めた〔金一九九四、一〇四頁〕。同年秋には、アムステルダムでもユグノー亡命者に対して、経済活動を自由に行い、経済力の多寡にかかわらず三年間税金が免除され、資本金を無利子で借り入れられることが保障され、公的援助を必要とする間は市場取引においても優遇されることが決まった〔Scoville 1960, p. 342〕。

このような移住奨励政策を受け、ユグノーのオランダ移入は一六八〇年代に加速し、五万から七万五〇〇〇人がオランダ各地に渡ったと言われる〔深沢一九九九、一九五頁〕。ヌステリングによれば、一六八〇年頃にはアムステルダムのワロン教会の登録者数は二六五〇人だったのに対し、一七〇一年から〇五年には七六〇〇人に増加している⁵⁾。彼らのおよそ三分の一は貧しく公的な援助を必要としたが、中には裕福な商人層を形成するものもあった。例えば、一七世紀末の婚姻登録簿によれば、アムステルダムで特権階級を構成していた貿易商人「コープマン」には、ルーアン、ボルドー、バイヨンヌ、ベルジュラック、パリといったフランスの都市出身の者が多く含まれた⁶⁾。これは言うまでも

なく、ユグノーの移住者たちである。同様に、一七〇一年から一〇年にアムステルダムで活動した貿易商人の三八%がユグノーで、オランダ人よりも多かったという統計もあり、これは同時期のロンドンにおける二八%よりも高い割合である〔杉浦二〇〇二、六六、七七頁〕。

したがって、アムステルダムでは他地域からの移民よりもユグノーの移入と社会進出が進んだと推測することが可能であり、ユグノーの商人や職工業者にとつては、アムステルダムへの移住はフランス国内よりも経済的な成功を見込める、魅力的な選択だったと考えられる。同時にそれは、貿易都市アムステルダムにとつても職工業、商業、金融業において利益をもたらすものだった。こうして、アムステルダムへのユグノーの移住は、安全で優遇された職業環境を求めるユグノーと、フランスの技術を欲するアムステルダムの双方の経済的利害が一致したために推し進められたと言える。

二一三、アムステルダムの出版環境

前節までの議論を踏まえ、本節では一七世紀アムステルダムの出版業がどのような特徴を有したのかを整理する。中でも、アムステルダムとロンドン、パリにおける組合制度、出版允許と検閲の違い、およびアムステルダムにおけ

近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワーク（七條）

るフランス語書物の出版に着目しながら、ユグノーの出版者がどのような職業環境を得ていたのかを論じる。

（一）組合制度

組合（しばしば「ギルド」と呼ばれる）とは特定の産業における同業者の集まりのことで、ヨーロッパ中近世社会においては、ある土地に定住して仕事をするには何らかの組合に加入していることが必須だった。アムステルダムで出版業を行うには、印刷業者、製本業者、書籍商のいずれかの組合に属していることが必要であり、これらの組合に加入するにはアムステルダムの市民権を有することが前提条件だった。しかし市民権は、アムステルダム出身者でなくとも購入や婚姻によつて獲得することができたほか、ユグノーや南ネーデルラント系の移民には無償で与えられた。また、慢性的な労働力不足により移民の受け入れが推奨されていたこともあり、アムステルダムでは地元住民でなくとも、組合への新規加入が比較的容易だったのである。その上、古くからアムステルダムの基幹産業であった大工や船大工では組合への新規加入が比較的難しかったのに比べ、印刷・出版業のような都市化とともに興隆した新産業では、移民に対してより広く門戸が開かれていた。

一方当時のロンドンでは、外国人の出版業への参入は

これほど容易ではなかった。イングランドでは一五世紀、外国出身の印刷工や書籍商が積極的に受け入れられ、世紀末から一六世紀初めにかけてデ・ウォルデやファックスに代表されるような大陸出身の印刷家が台頭した [Fobvre-Martin 1958, pp. 273-274]。しかし、外国人印刷業者の増加に対する国内不安が高まり、一五二三年に外国人印刷家がイングランド人以外の徒弟を雇うこと、二人以上の外国人の職人を雇うことが禁止された [箕輪二〇一一、一四二一一四三頁]。さらに、一五三四年には外国人印刷・製本業者に対する経済活動の自由が制限され、輸入書籍の小売りが禁じられた。そして、一五五七年にメアリー一世によつて書籍の同業組合である「ステーションーズ・カンパニー (Stationers' Company、印刷・出版業組合)」が国王特認の法人として保護されると、イングランドでは業界を寡頭支配したがるカンパニー側と、監視の目を光らせんとする権力側による相互の受益体制が一七世紀後半まで続いた。カンパニーに所属するためにはロンドン市民でなければならず、出版を行うにはイングランド人親方の下で七年以上の徒弟修業を行う必要があった。一六九五年に出版法が廃止されてもそれは変わらず、ゆえに、一七世紀後半にイングランド国教会の主導でユグノーの受け入れが進んでも、彼らがイングランドで書籍出版を

開始するには相当の期間を要した。

一方、ルイ一四世治世下のフランスでも、イングランドと同様の厳しい認可制が敷かれた。フランスの制度の特徴は、二宮が指摘しているように、組合そのものが厳選された特権的な存在であり、他の多くの書籍業者たちを監視・統括する役目を担っていたことである〔二宮一九八二、八頁〕。ルイ一四世は一六一八年の王令で、「わが王国とりわけわが善き都パリに印刷業者・書籍商・製本業者があまりにも数多いため、破廉恥な書物・誹謗文書が著者も印刷所も印刷人の名も記さずに無数に出版されている」ことを理由に、各業種において毎年一名の親方しか組合に受け入れてはならないことを定めた〔二宮一九八二、九頁〕。組合員は国王や宗教、つまりカトリックに反対する書物が印刷・販売されないよう工房や書店を回り、仕事が正しく行われているか監視する立場にあった。このような制度のために、一七世紀フランスの出版業では王権や教会と結びついた書籍業者による寡占化が進んだ。

(二) 出版允許と検閲

組合に加入し、書籍業者の一員となったとしても、印刷物の出版には王権の許可や当局の検閲を受ける必要があった。この点に関して、フランスとオランダは特に対照的な

様相を呈していたと言える。

フランスでは印刷技術の登場以来、神学書など一部の書物に対する許可制が敷かれていたが、一五六六年の王令で、すべての出版物が王権の許可を得なければならぬと定められた。同時に、王は一部の出版者に対して独占出版を認める特別な許可（出版允許 *privilege*）を与え、海賊版を防止した。一方で、出版允許を得ていない出版物は、大法官による検閲を受け承認（*approbation*）を得なければならなかった。当初はカトリックに反する異端書のみが禁じられていたが、その基準はしだいに厳しくなり、一七世紀後半には反宗教文書、反国家文書、誹謗文書、風俗紊乱の書の四つのカテゴリーが禁止の対象になった〔二宮一九八二、一三頁〕。このような規制は、外国から流入する書物に対しても同等かそれ以上に厳しく適用され、必ず組合員による検閲を受けなければならなかった。また、これらの手続きを踏まなければ罰金、荷の中身が海賊版であれば組合が販売、発禁書であれば破棄されると定められた⁸⁾。許可制は楽譜出版においても効果的に機能し、一五五一年すでに出版允許を得ていたル・ロワ・エ・バール社は、フランス国内における活版印刷楽譜の独占的な出版、販売を実現し、これを一七九〇年まで行使した⁹⁾。

一方、オランダではそもそも政府の中央集権体制が弱く、

フランスのような強力な認可制、検閲制度を敷くことは不可能だったと言える。出版允許は一応存在したが、それがなければ出版できないというものではなく、つねに海賊出版が横行した。検閲に関して言えば、外国に対する誹謗文書、無神論書、破廉恥な書物などは役所による検閲の対象になり、異端と思われる宗教書には教会関係者からの苦情が入った。しかしながら、違反した場合には罰金、逮捕、禁固刑などの刑罰が課されることもあったが、総体としてフランスの状況に比べれば非常に緩いものだったと言われ
る [Berkvens-Stevelinck 1984/1990, p. 411]。

以上のように、オランダは書籍業組合への加入、出版物に対する規制や検閲において、イングランドやフランスに比べて高い自由度を有していた。そのため、権力からの規制や監視がまったくなかった訳ではないが、相対的な「出版の自由」が認められる環境にあったと言える。

(三) アムステルダムにおけるフランス語書物の出版

一七世紀アムステルダムの書籍出版は、先述のような環境の他に、フランス語書物の出版拠点としての側面も有していた。これらを執筆したのは、主にフランスから亡命してきたユグノーの知識人たちである。彼らは母国でプロテスタント系の書物が発禁となるのを受け、自らの著作物を

世に送り出すべくオランダに集結した。著名な作家ではピエール・ベール、ジャン・ルクレール、ピエール・デメゾなどが挙げられる。中でもベールが記した『歴史批評事典 Dictionnaire historique et critique』や月刊誌『芸芸共和国便り Nouvelles de la république des lettres』は、西欧全体で読まれ、後の啓蒙思想に強く影響を与えたと言われる [金二〇一三、一八一―一九頁]。また、ベールのようなユグノーの著述家だけでなく、フランス在住の作家たちがオランダで自著を出版することも珍しくなかった。その中にはラ・フォンテーヌの『風流譚 Contes et Nouvelles』や、一八世紀後半にはルソーの『社会契約論 Contrat social』や『エミール Emile』の初版も含まれる。彼らもやはり、オランダの自由な出版風土を利用したのである。

これらのフランス語書物の印刷・出版に従事したのがユグノーの書籍業者である。彼らは各国に離散した同胞や、母国の友人・知人に向けてフランス語書物の出版に励むことで、アムステルダムをバリエに次ぐフランス語書物出版の中心地とならしめた。代表的な人物ではリヨン出身のユグタンや、ソミュール出身のデボルドなどが挙げられる [Berkvens-Stevelinck 1984/1990, p. 405]。彼らは書物なるべく小さな判で印刷し、装丁なしの廉価版で販売することで、多くの部数売りさばいた。そうすることで、大

きな判で装丁付きで出版されるパリの書物に対抗したのである。また、ユグノーの出版者以外にも、イングランド人ジョンソン、ドイツ人フリッツユ、オランダ人レーズ、モエティンス、ヴァン・デュレンなどが、一六八〇年以降フランス語書物の需要が急激に伸びるのを見て、この領域に参画した。彼らはしばしばフランス語の堪能な校正者を雇って言語チェックを行ったが、それが亡命ユグノーの仕事ともなった。

こうしてオランダで出版されたフランス語書物は、主に郵便と代理人によってヨーロッパ各地に流通した。まず、アムステルダムには発達した海運業と郵便制度があったため、書籍商たちは書物の入った梱を遠くまで送ると同時に、郵便を使って各地の商人と取引を行うことができた。また、彼らは周辺の都市に代理人を置き、品物を預けることで販路を拡大していった。同時にユグノーであれば、離散した同胞のネットワークによっても、書籍を流通させていた。したがって、ユグノーの書籍商は同業者の流通経路とユグノーのネットワークの双方を用いることで、広範囲かつ効果的に書物を流通させることができたのである。

三、ロジェエの出版活動にみるユグノー書籍商のネットワーク

前章で見たように、一七世紀から一八世紀初頭のアムステルダムの出版業は、ユグノー労働者にとつて有利な環境、イングランドやフランスに比べ相対的に高い出版の自由、ユグノーの著述家と出版者によるフランス語書物の出版によって特徴づけられる。本章ではこのような状況を踏まえ、ロジェエに関するケーススタディを行い、ロジェエの活動においてユグノーのネットワークがどのような役割を果たしていたのかを考察する。

三―一、ロジェエの出版活動概観

エティエンヌ・ロジェエは一六八五年のナントの勅令廃止を受け、翌年アムステルダムに渡り、ワロン派教会の信徒となった。移住後しばらくのロジェエの動向は定かでないが、一六九一年から三年半にわたってアムステルダムの楽譜出版者アントワーヌ・ポアンテル (Antoine Pointel, 一六六〇―一七〇二) のもとで見習いを行い、その後書籍商ジャン＝ルイ・ド・ロルム (Jean-Louis de Lorme, 一六六五頃生) とともに出版業を営むことで、一六九五年一〇月二四日に書籍業者の組合員資格を得た。前章で言及したように、組合加入の前提となるアムステルダム市民権

は、ユグノー移民には無償で与えられた。また、ポアンテルとド・ロルムはいずれもワロン派教会の所属ではないが、近親者にワロン派やプロテスタントの新教会の信徒がいた。このような事情を鑑みると、ロジェは職業参入の際にすでに、ユグノーであるがゆえの人的・制度的便宜を受けられたと想定できる。

ロジェの出版活動については主に、彼が発行したカタログと新聞広告をもとに知ることができる。それらを見ると、ロジェは書籍出版と楽譜出版の双方を継続して行っていたことが分かる。楽譜に関して言えば、一六九六年に発行された最初のカタログ [Recueil II 1696A]^①には一一点の楽譜が掲載されるのみだが、翌年に四〇点、一七〇〇年に一〇〇点、一七〇八年には三〇〇点を突破し、一七一六年の最後のカタログでは五八五点に達する。その内訳は、「イタリア風」や「イタリアのソナタ」と呼ばれる器楽曲が約半数を占め、フランス語の声楽曲と「フランス風」と呼ばれる器楽曲の合計がおよそ三割、残りの二割は宗教歌曲、音楽理論書、チェンバロなど通奏低音用の器楽曲である。

一方で、書籍出版に注目すると、初期の数年間には楽譜より多くの書籍が出版されることもあった。ロジェのすべてのカタログで書籍が確認される訳ではないが、例えば一六九六年の最初のカタログ [Recueil II 1696A]には

一一点の楽譜に対して二一点の書籍が掲載され、同年のより遅い時期のカタログ [De La Force 1696B]では、書籍は楽譜の四倍の数がある。しかしその次に書籍が確認される一六九八年のカタログ [La Martinière 1698F]では、楽譜七三点に対して書籍は四一点にとどまり、以降、一六九九年の一部のカタログ [Della Faille 1699F]で一九九点と突出して多いほかは、書籍は四八点から七五点の間で安定している。したがって楽譜の増加と引き換えに、ロジェの出版物全体に占める書籍の割合は小さくなるが、言い換えれば楽譜出版部門を拡大させる中、書籍出版も継続して行っていたと言える。このような事業の展開の仕方、同時代の出版者の中でも珍しいものだった^②。

こうして出版された書籍は、わずかにラテン語のものが含まれるほかは、ほとんどがフランス語の書物であった。また、カタログには「E・ロジェの所で印刷されたか、彼が所有している書物 Livres imprimés chés[scilicet] E. Roger, ou dont il a nombre」という見出しが付けられているように、これらの書物はロジェが印刷したもの以上に、他の印刷業者が手掛け、ロジェが販売のみ行っているものを含んでいた。例えば一六九九年のカタログで確認されるクセノポンの『ソクラテスの思い出 Les choses mémorables de Socrate』のフランス語訳などは、タイトル・ページから

ロジェ自身が出版した書物と見られる。^⑮しかし、一六九八年のカタログに掲載される四八点の書物には、ロジェとド・ロルムが共同で出版したものが一〇点、共同出版を行う以前にド・ロルムが単独で出版したものが四点確認される。前者では、ド・ヴェルトの『スウェーデンの革命史 Histoire des révolutions de Suede』が挙げられるが、これは一六九五年にパリの書籍商ブリュネが出版允許を獲得して出版した書物を、ド・ロルムとロジェが海賊出版したケースである。^⑯一方後者ではテンブルの『イングランド史入門 Introduction à l'histoire d'Angleterre』があり、これは一六九五年にロンドンのシンプソンによって出版された、同名の英語による書物のフランス語訳である。^⑰また、その他に見られるのは『竜騎兵なしで改宗させる人 Le convertisseur sans Dragon』が、ロットルダム^⑱の書籍商アシエによって一六八八年に出版されたものであるように、他の出版者が印刷したものを、ロジェが販売していたケースだと考えられる。

このように、ロジェは一般に楽譜出版者としてのみ知られるが、書籍出版にも印刷と販売の面で関わり、二つの分野を両立させていたことが分かる。またその内容は、楽譜がイタリア、フランスを筆頭に多様な地域の音楽を扱うのとは対照的に、もっぱらフランス語の書物で構成され、そ

の中には『竜騎兵なしで改宗させる人』のように明らかにユグノーの受難を綴ったと思われる書物も含まれた。

三一、書籍商のネットワークによる書物の流通

ド・ロルムの書簡から

前節ではロジェの出版活動を概観することで、フランス語書物を中心とする書籍出版が継続的に行われていたことが判明した。本節では書籍商のネットワークに注目し、ロジェが書物の流通経路にどのように接続していたのかを考察する。この点に関しては、ロジェの共同出版者であったド・ロルムによる書簡が有益な手がかりとなる。阿姆斯特ダムの市立文書館に所蔵される「ワロン改革教会アーカイブ Archief van de Waalsch Hervormde Gemeente」は、一五八二年から一九七四年に書かれた阿姆斯特ダムのワロン教会管区に関する未刊行の史料である。一二種類の文書群で構成され、一〇番目にあたる「執事たちの教会会議の記録 Archief van de Consistie van Diakenen」〔請求記号 201.10.6.4〕の中に、ド・ロルムが一七〇七年から一〇八年に送った手紙の「複写簿 Kopieregister」が二〇四頁にわたって残されている。この記録は手紙そのものではなく、ド・ロルムがパリやルーアンの書籍商宛てに送った手紙の写しを年代順に記したもので、ユピストの特定はさ

れていないが、五種類以上の筆跡が認められる。

この書簡を使ったロジェに関する研究は、ラツシュによって、パリの楽譜出版者ジャン＝バティスト・クリストフ・バラール (Jean-Baptiste-Christophe Ballard¹⁷、一六六三頃—一七五〇)との事例を対象に行われた。それによると、ド・ロルムはバラール宛ての書簡でたびたびロジェについて言及し、例えば一七〇七年八月八日の書簡ではロジェの出版カタログを送ると約束している。しかし、バラールの一七〇九年のカタログを見る限りでは、そこに含まれるロジェの出版物は最新のものではない。一方でロジェの一七〇八年のカタログには、バラールの出版譜が追加されているだけでなく、新たにバラール以外の出版者による楽譜も販売されている。¹⁸ ラツシュはこのような楽譜に関して、「間接的な方法で手に入れた可能性がある」[Rasch 1998, p. 243]とするのだが、ド・ロルムがフランスの数々の書籍商と取引していたことを考慮すると、それらがロジェの楽譜入手ルートとなっていた可能性が考えられる。よって、ロジェと交流のあった書籍商について、この書簡から探る余地があるだろう。

表1. ロジェに関する内容を含むド・ロルムの書簡

日付	宛先
1707/01/06	ジャック・エティエンヌ：パリの書籍商
1707/07/28	ジャン・ブド：パリの書籍商
1707/08/08	ジャン＝バティスト＝クリストフ・バラール：パリの楽譜出版者
1707/08/25	ブド
1707/08.29	バラール
1707/09/29	ブド
1707/10/18	ピエール・ド・ヴァレンヌ：パリの書籍商
1707/10/27	ブド
1707/11/14	シャルル・ロビュステル：パリの書籍商
1708/01/12	バラール
1708/02/02	バラール
1708/02/06	アンドレ・ダシエ：パリの翻訳家、学者
1708/02/13	バラール
1708/02/20	クロード・ジョール：パリの書籍商、印刷家
1708/03/26	ブド夫人
1708/03/29	ブド夫人
1708/08/30	ピエール・ウィット：パリの書籍商

Van Eeghen 1960, Vol. I より作成

一七〇七から〇八年にド・ロルムがフランスの書籍商へ送った手紙の中で、ロジェに關することが言及されているものは一七点確認される(表一)。それらのうち五点がバールに宛てたもので、残りの二点はその他のさまざまの書籍商宛てに書かれたものである。宛先となったのはみなバリの書籍商、印刷家あるいは翻訳家である。その中でもジャン・ブド (Jean Boudot、一六八五—一七五四) およびブド夫人に宛てた手紙が六点あり、これらの文面からロジェがド・ロルムを通じてパリと書物の交換を行っていた様子を見て取ることができる。例えば一七〇七年八月二五日の書簡では、ド・ロルムが自身の書物と一緒にロジェの書物を送る旨が書かれている。

私はロジェ氏の書物を気にかけて、『オッサの手紙』が印刷されたらそれを取りだし、しかるべきときにあなたに全てお送りするように配慮します。ですが旅券のことを考えてください。というのも二巻で構成される一二折り判の書物があり、その題名をお送りしたいのですが、あなた方の所〔フランス〕で海賊出版されるのではないかと恐れているのです。

この時点ではロジェの存在が言及されるのみで、実際に送った書物の内容は分からないが、一〇月二七日の書簡に具体的な書名が書かれている。

史苑 (第七七卷第二号)

ロジェ氏はあなたのために、次のものを私に送りました。シュタンの旅行記全七巻・一二折り判を二四冊、フォリオ判のフラウターを二冊、ヘプライ語の聖書・八つ折り判を三冊、『ギリシア神話小品集』八つ折り判を四冊、『モルツカ』を四冊、モンの新約聖書を六冊、セルバンテスを六冊。

これらの書物うち、「シュタンの旅行記」と呼ばれるものは『ゴティエ・シュタンの東インド諸島への旅行記 Voyages de Gauthier Schouten, aux Indes Orientales』というタイトルでロジェのカタログに掲載されている書物のことだろう。詳細は不明だが、一七〇七年の『ガゼット・ダムステルダム』の広告で、ロジェがこの本を「印刷したところ *vent d'imprimer*」だと書いているため、ロジェ自身の印刷物である可能性が高い。一方、「モルツカ」と呼ばれる『モルツカ諸島の征服史 *L'histoire de la conquête des Iles Moluques*』は、ロジェのカタログ上では確認できないが、アムステルダムの書籍商デボルドによって出版されたものであることが、新聞広告から確認される。デボルドはロジェと同じユグノーであり、一七〇三年から〇五年にはド・ロルムと共同で『ミラノの暦 *Almanach de Milan*』を出版した書籍商である。この例が示すように、ロジェは自らの出版物だけでなく、境遇を同じくする書籍

近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワーク（七條）

商の出版物も同時にパリに送っていたのだ。

また、少し時期が遡るが、一七〇七年九月二九日に送られた書簡から、ロジェがブドに書物を送るだけでなく、逆方向の発送も行われていたことが分かる。

彼（ロジェ）によると、ウィット氏があなたに件の半紙を要求したが、一向に納得できなかったとのことです。ロジェ氏は、あなたに書いたすべてのことに関して満足できない限り、彼が望む書物のうち、いかなるものも私に要求しないそうです。

一八世紀以前の書籍業では、代金は基本的に物々交換によって支払われていた。ロジェとブドの間でも、この書簡に書かれているように、書物の供給が相互に行われることで取引が成立していたと考えられる。

これらの書簡から、ロジェがド・ロルムとの協力体制をもとに、バールだけでなくパリの書籍商とも関係を構築していたことが分かる。また、デボルドの例が示すように、アムステルダムその他の書籍商の出版物も販売していたことが見えてきた。そのようにして、ロジェは書籍商のネットワークをもとに国際的な書籍販売を成立させていたと言え、同時にその経路が楽譜販売にも役立てられた可能性が考えられる。

三―三、楽譜出版におけるユグノー・ネットワーク――

ヴァイヤントの代理人活動

書籍商のネットワークが楽譜出版においても共有されていたことを示すのが、ロンドンの書籍商ヴァイヤントの代理人活動である。第二章で言及したように、オランダの書籍商の間では離れた土地に出版物を流通させるための手段として代理人制度が浸透していた。ロジェもこの制度を積極的に用いた一人である。カタログでは、一七〇一年にロッテルダム書籍商のファン・デア・フェールが代理人として記載されたのを皮切りに、一七〇三年にロンドン、一七〇六年にケルン、一七〇八年にベルリン、リエージュ、一七一〇年にライプツィヒ、一七二二年にブリュッセルとハンブルクの代理人が追加された。各地の代理人となっていたのは一部を除いて皆書籍業者であり、中にはド・ロルムと書籍の交換をしていた人物も含まれた。ロジェはこうした書籍商に出版物を預けることで、遠隔地への販売を可能にしていたのである。

これらの都市の中でも、ロンドンにはオランダ国外ではいち早く代理人が設置された。ロンドンの代理人を務めたフランソワとポールのヴァイヤント兄弟（François [Francis], Paul Vaillant）は、フランスのロワール地方出身のユグノーである。ヴァイヤントは一六八六年に渡英

して以降、イングランドに住むユグノーに向けて大陸から仕入れたフランス語書物の販売を行った。^{②⑤} ロジェとヴァイヤントがどのように知り合ったのか定かではないが、ヴァイヤントの旧店舗を引き継いだオランダ出身の書籍商モエティンスがロジェの娘婿ミシェル・シャルル・ル・セーヌ (Michel Charles Le Cène、一六八三／八四—一七四三) の女兄弟「エリザベスと結婚した」という記述がある [Swift 1992, p. 270]。このような状況から、ロジェ、ル・セーヌ、ヴァイヤントが共通のネットワーク内に生きていて、その共通項とはユグノーの書籍商であったことが想定される。

ヴァイヤントとロジェに関してはこれまで、ロンドンの楽譜出版者ジョン・ウォルシュ (John Walsh、一六六五—一七四〇) とロジェのライバル関係を論じる中で触れられてきた [Smith 1948、Leisure 1969、Rasch 1995]。これらの研究により、ロジェとウォルシュがイタリアの作曲家コレッリの作品をめぐって広告合戦を行ったことが明らかにされたが、両者の対立構造のみが強調され、書籍商ヴァイヤントがこの争いに関与していたことは見過ごされがちである。そこで、ヴァイヤントによる楽譜出版への貢献という観点から、一連の広告を読み直してみたい。

ヴァイヤントの楽譜販売広告は、一七〇〇年八月二四日から二七日の『ポスト・マン The Post Man』^{②⑥} において最

初に認められる。このときヴァイヤントは、コレッリの作品を自ら印刷したかのように主張する。

すべてのシンフォニーの愛好家たちへ。ストランドのカトリーヌ通りの近く、フランスの書籍商フランシス・ヴァイヤントが次のように告知する。彼「ヴァイヤント」は今、コレッリの新しいソロをスコアで、ローマのオリジナルとあらゆる点で同じくらい美しく彫版された状態で印刷している。^{②⑦}

「コレッリの新しいソロ」と呼ばれるのは、ヴァイオリンと通奏低音のための一二のソナタ集、作品五のことである。また「ローマのオリジナル」とは一七〇〇年一月一日に出版された初版譜のことで、ヴァイヤントはその再版を告知したことになる。広告にある「彼は今、〔中略〕印刷している」という言い回しから、一見ヴァイヤントがこの再版を行ったようにも取れるが、実際はロジェが出版する予定の^{②⑧}ところを、あえてこのように言っていたのである。

この作品に関するアムステルダムでの最初の広告は一七〇一年一月二〇日に確認されることから、ヴァイヤントの広告は楽譜の出版およびアムステルダムでの告知に半年ほど先行することが分かる。ロンドンでの告知が一足早く行われたのは、ロジェとウォルシュのライバル関係のためだった。ウォルシュは一七〇〇年七月八日、つまり上

述のヴァイヤントの広告に先んじて『ロンドン・ガゼット London Gazette』⁽²⁹⁾にコレッリの作品五に関する広告を出している。ウォルシュは「かの有名なアルカンジェロ・コレッリ氏の新しいソナタが、七〇の銅板に入念に彫版され、大きな極上の紙に印刷された状態で、まさにローマからもたらされ、来週の月曜日には予約購入者の皆様にお届けする準備ができるでしょう」⁽³⁰⁾と述べている。ウォルシュの告知を受け、作品五の再版を予定していたロジェは、遅れを取るまいとヴァイヤントに再版を告知させたと考えられる。

この後、ウォルシュとヴァイヤントの間で広告の応酬が続く。ウォルシュはヴァイヤントの広告が出された直後、八月二六日の『ロンドン・ガゼット』で追加の広告を打った。そこでは自身の販売する楽譜について「アムステルダムのものよりずっと美しく間違いが少ない」⁽³¹⁾と述べ、ヴァイヤントを牽制した。一方で、ヴァイヤントはウォルシュの広告を受け、八月三一日から九月三日の『ポスト・マン』にて、コレッリ作品の出版はまだ行われていないことを主張した。

いくつかの新聞で、アルカンジェロ・コレッリによって作曲された一二のソナタあるいはソロは、「中略」カトリック通りのハーブとオーボエの看板のもとで

売られるはずで、それがアムステルダムのものより美しく正しいということだが、「中略」アムステルダム版はまだ出版されていないことから、上述の広告は真実ではない。もし誰かがストランドのフランシス・ヴァイヤント書店にて、イングリッドで唯一の見本をよく検討するならば、アムステルダム版に対しての考えは不適切で事実無根だということがよく分かるでしょう。⁽³²⁾

その後もウォルシュはローマ版の販売を宣伝し続けるが、九月一七日から一九日の『ニューズ News』に掲載された広告ではアムステルダム版に対する中傷が消えていることから、ヴァイヤントの広告には一定の効果があつたようだ。ウォルシュとの対立は二六九七年に独立したばかりのロジェにとつて、ともするとロンドンでの商売に失敗する危険性を伴うものだっただろう。したがって、ロジェがこの競争を切り抜けるためには、ロンドンですでに一〇年以上活動しているヴァイヤントの存在が欠かせなかったと考えられる。

さらに、ヴァイヤントがロジェを擁護する姿勢は、アムステルダムのライバル出版者ピエール・モルティエ(Pierre Mortier、一六六一—一七二〇)に対しても及んだ。一七〇八年一〇月一五日の『デイリー・クラント Daily

『Courant』にて、ヴァイヤントはアルビノーニの作品五⁽³⁾を四シリングで販売すると宣伝した後、モルティエの楽譜を持参したら値引きすると言っている。

上述のアルビノーニの楽譜について、アムステルダムでモルティエによって海賊出版されたものをお買い求めになり、あまりに不正確なので交換するように私の所へ持って来られた方々がいらつしやいますが、私は同じものを三「シリング」で販売します⁽⁴⁾。

このような広告が出された背景には、一七〇七年から〇九年にかけてモルティエがロジエに対して行った執拗な海賊行為がある。オランダでは一七〇九年二月から四月の『ガゼット・ダムステルダム Gazette d'Amsterdam』上で、ロジエとモルティエの中傷的なやり取りを含んだ広告合戦が繰り返された。ロンドンでの広告は、先述のコレツリの時と同様、アムステルダムでの広告に半年ほど先行する。すなわち、ヴァイヤントはウォルシュに対してだけでなく、モルティエに対しても迅速に対応し、ロジエの代理人として積極的な働きかけをしたのである。

以上のように、ロンドンの新聞に見られる広告から、ヴァイヤントがロジエの利益を代弁する者として現地の楽譜出版者と広告合戦を行い、ロジエの出版物が流通する手助けをしていたことが分かった。書籍商ヴァイヤントが楽譜販

売にも関与していたように、ユグノー書籍商のネットワークは、楽譜出版においても同様に機能していたと言える。

四、結び

本稿では、近世オランダの出版業において、ユグノーのネットワークがどのような機能を果たしたのか、ロジエの活動を切り口に考察してきた。本稿の前半では一七、一八世紀のヨーロッパ社会においてユグノーが直面した状況を整理した。ユグノーはフランス王権からの迫害により改宗あるいは亡命を迫られたが、国際的な規模で彼らを支援する手段が講じられ、またユグノー自身も各地に離散した同胞をつなぐネットワークを構築した。アムステルダムでは特に、市民獲得や事業開拓のハードルが下げられることで移住が奨励され、ユグノーは富裕な商人層をも形成した。また出版業においては、外国人の参入条件を厳しく設定していたロンドン、王権による厳格な認可制が敷かれていたパリに比べ、アムステルダムは相対的な出版の自由を有していた。そこへ、ユグノーの著述家や書籍商によるフランス語書物の出版という要因が加わることにより、アムステルダムは当時の西欧の出版業において最も活気のある環境を形成したと言える。

本稿の後半では、こうした条件下でロジェがどのような出版活動を展開したのか、周辺人物との関わりを軸に考察した。まず、ロジェは楽譜出版を拡大しながらフランス語書物の出版も継続して行い、その中で書籍商のネットワークを活用した販売手法を取っていたことが分かった。中でも、協力者ド・ロルムの書簡からは、フランスに豊富な人脈をもつド・ロルムの助力を得てパリの書籍商と書物の交換を行うロジェの姿が見られた。また、ロンドンの代理人を務めたヴァイヤントの新聞広告からは、ヴァイヤントがロンドンや阿姆斯特ダムのライバル出版者を牽制し、ロジェの楽譜販売を手助けしていたことが見えてきた。つまり、ユグノー書籍商のネットワークが楽譜出版においても共有され、それがロジェの国際的な楽譜販売につながったのである。

こうして、ロジェはユグノーの出版者としての特性を生かし、ド・ロルムやヴァイヤントのような書籍商と協力することで、他の楽譜出版者が到達しえなかった広範囲にわたる流通網を手に入れたと言える。ロジェの例を通じて、阿姆斯特ダムにおける楽譜出版の急速な発展に関して、これまで言われてきたような彫版印刷の早期使用に限らない、宗教文化や産業制度からの要因を指摘することが可能となるだろう。すなわち、近世オランダの出版業がユグノー

の集結とネットワークの構築、新規参入や出版の容易さにもない発展する中で、書籍出版と楽譜出版の人的資源や販売手法の共有が進み、楽譜出版もまた飛躍的に発達したのである。そうした要因の中でも、亡命ユグノーのネットワークは出版物の国際的な流通を可能にした点で、この時期のオランダの出版文化において重要な役割を果たしていたと言える。

註

- (1) 書物を取り巻く産業には、活字の鑄造、組版、印刷、製本などに分業された製造業の部分と、書物の小売り、卸売り、流通に従事する商業の部分が含まれる。「出版業」といった場合、狭義には後者のみを指すが、一八世紀後半までの書物の生産と販売では一つの工房ですべてのプロセスが行われることも珍しくなかった。そのため本稿では、この分野にかかわる産業を広く「出版業」、それに従事する職業を「出版者」と呼び、販売に従事する人物であることを言う場合には「書籍商」を用いる。
- (2) たとえば代表的な音楽辞典である『ニューグロヴ世界音楽大事典』の「楽譜の印刷と出版」の項目、および『Die Musik in Geschichte und Gegenwart (歴史と今日における音楽)』の「音楽出版と楽譜の売買」の項目ではそれぞれ、一八世紀初頭のアムステルダムが、ロンドンと並ぶ楽譜出版の中心地として位置づけられるが、技術的発展と後代への影響に主眼を置いており、出版制度や社会的文脈には触れられていない。
- (3) イタリア音楽出版者としてのロジェの評価は一八世紀後半のロンドンで始まり、それが今日でもロジェに対する認識の基盤となっている。一方、二〇世紀中ごろから、パンシエールやルシエールによって、彫版印刷と国際的な販売網を両立させた人物としての評価も始まった [Princherle 1946, *Lesure* 1969]。
- (4) 例えば一六六一年に発布された法令では、ユグノーの職人たちは同業組合から除名され、官職、公証人、弁護士、助産婦などに就くことが禁止された。また同年から

史苑(第七七卷第二号)

- 一六六六年にかけて、権力による改革派教会の再検討が行われ、礼拝堂や教会学校が相次いで閉鎖に追い込まれた [「ムール」一九八五、二七九—二八四頁]。
- (5) 同様に、ワロン教会による移入と移出の記録によれば、一六八一年から一六九〇年の一〇年間に四九一六名がアムステルダムに入植した [Musteising 1986, pp. 21-23]。
- (6) コープマンの出身都市上位二五位のうち、一〇がこれらフランスの都市で占められていた [杉浦二〇〇二、六五—六六頁]。
- (7) 杉浦が指摘するように、組合による移民規制あるいは推奨と、移民の職業選択との関連については、いまだ体系的な研究が行われていない [杉浦二〇〇〇、五六—五七頁]。よって、ユグノー移民が書籍商ギルドに参入する際、他の地域からの移民に比べ何らかの優越性を持っていたかどうか、今後慎重に検討する必要がある。
- (8) ただし実際は組合員も共犯となって、外国の発禁書の輸入が盛んに行われた。
- (9) この出版免許は活版印刷術に限って有効だったため、彫版印刷であれば咎を受けることなく楽譜を出版することができた。したがってパリでは一七世紀末以降、彫版印刷による出版者が台頭し、自らの出版権を守るために個別に出版免許を取得した。また、フランスの免許制度は国境の外に対しては何の効力も持たなかった。そのため、アムステルダムではフランスの出版譜がさかんに海賊出版されたが、それに対してフランス側から処罰が下されることはなかった [Guillo 2005, pp. 125-126]。
- (10) ロジェは一六九六年から一七〇六年までの毎年と、

近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワーク（七條）

- 一七〇八年、一七二二年、一七一六年にカタログを発行した。一年に複数回、新たなカタログが発行されることもあり、その総数は現在判明しているだけで四五点にのぼる。これは同時代の主要な楽譜出版者と比べても抜きんでて多く、ロジエがカタログを楽譜販売の有用な媒体と見なしていたことが窺える。なお、ロジエのカタログに関しては、筆者の博士論文第二部で詳細に扱っている〔七條二〇一七〕。
- (11) カタログの略称はラッシュュによるものを使用した。本文中で言及するカタログの書誌情報は文末の「参考資料一覽」に記した。
- (12) ロジエと同時期に活動した主要な楽譜出版者は、パリのバラール、ロンドンのウォルシュを例に取っても、いずれも楽譜のみを手掛けている。また、オランダの書籍商がまれに楽譜を出版することがあったが、主要な活動を言えるほど継続的に行われるものではなかった。
- (13) タイトル・ページには「エティエンヌ・ロジエの費用で Aux dépens[sic] d'Estienne Roger」という記述が見られる。
- (14) ド・ロームとロジエの版では、著者がド・ヴェルトからル・ボヴィエにすり替えられている [Van Eeghen, Vol. II, pp. 68-69]。
- (15) ド・ローム版の表紙には、アムステルダム版画家ラウケンによるテンプルの肖像画が描かれている。これの元になった絵に関して、ファン・エーヘンの作品だと推測している。また、フランス語訳を担当したのはド・ロームのアムステルダムでの協力者だったと言われる [Van Eeghen, Vol. II, pp. 50-51]。
- (16) 「執事」とは改革派教会特有の役職である。その仕事は「貧者、囚人、病人のための贖金を集め、それを配分し、また彼らのもとを訪問、世話すること」で、信徒間の相互扶助を取り仕切っていた [ムール一九八五、一九七—一九八頁]。
- (17) ラッシュュはロジエとバラールのカタログを突き合わせることで、両者が一七〇四年までは楽譜の取引を行っていたことを明らかにした。この関係性はしかし、ロジエがバラールの出版物を無断で再版し、自らの出版物として販売したことから悪化し、一七〇五年を境に、バラールは自らの出版物を一切提供していない。したがって、書簡が書かれた一七〇七年から〇八年には、ロジエとバラールの協力関係はロジエの海賊行為によってすでに破綻していた。
- (18) 一七〇五年にリブによって出版された、カンプラのオベラ《アルシーヌ Alceine》などが挙げられる。
- (19) “J'auray soin des Livres de Mr. Roger & de retirer les Lettres d'Ossat lors qu'elles seront imprimées, & vous enverray le tout en son templsic, mais songez au passeport car j'ay un Livre qui fini en 2 vol in 12°. dont je voulais envoyer le titre & j'aprehend[sic] qu'on ne le contre facelsic chez vous.” [Amsterdam Stadsarchief, 2011.10.6.4, 2180B, p.13] 「旅券 passeport」に関して一六九四年のアカデミー・フランセーズによるフランス語辞典では、「君主、あるいは権力を有する人物から、人物、家畜、商品の通行における自由と安全のために与えられる命令書 Ordre par escrit donné par le Souverain, ou par celuy qui a pouvoir de luy, pour la liberté & la sureté du passage des personnes, des hardes, des marchandises,

&c.」と定義されている。書簡の文脈から、(17)では書物の運搬を許可する証書だと考えられる。

- (20) “Mr. Roger m’a envoyé pour vous 24 Voyage 7 vol. 12^o de Schouten, 2 Gruyter fol, 3 Biblica Hebraica 8^o, 4 Opacula mythologia garaea 8^o, 4 Molluques, 6 Testaments de Mons, 6 Cervantes.” [Amsterdam Stadsarchief, 201.10.6.4., 2180B, p.60]

(21) 一七〇七年七月八日および一九日の『ガゼット・ダムステルダム』の広告。ただし、この旅行記はカタログでも広告でも全二巻と記されていることが、書簡の内容と食い違ふ。よく似たタイトルで『インド会社の旅行記集 Recueil des Voyages de la Compagnie des Indes』という書籍があり、同時期に第七巻まで販売されていた。ド・ロルムは両者を混同しているのかも知れないが、いずれにせよロジエ自身による印刷物である。

- (22) 『ガゼット・ダムステルダム』では一七〇六年六月二二日から七月一三日に確認される [Van Eeghen, Vol. II, p.205]。
(23) 一七〇三年と一七〇四年の二二月の『ガゼット・ダムステルダム』についで、デボルドとド・ロルム連名による広告がある。
(24) “...il (Roger) m’a dit que Mr. Witte vous avoit demander les defectts en question mais qu’il n’avoit jamais pu en avoir raison. Il dit qu’il ne me demande aucun Livre de ceux qu’il voud[r]oit, a moins qu’il n’aye eu satisfaction sur tout ce qu’il vous as escrit.” [Stadsarchief Amsterdam, 201.10.6.4., 2180B, p.21] “defectt” に関して、ファン・エーヘンは「完全な一冊の本をなすことができないが、不完全な本を補うために使われる紙 vellen, 史苑(第七七卷第二号)

waaruit geen vollendig exemplaar samen was te stellen en die gebruikt werden ter completering van onvolledige exemplaren」を定義している [Van Eeghen, 1960, Vol.I, p.13]。本稿では「半紙」と訳した。

- (25) しかし、イングランドの書籍業界では外国人参入のハードルが高く、自ら書籍を印刷・出版することはできなかったため、それが可能になったのはフランスワの孫のニコラ(二世)・ブレヴォストがロンドンの徒弟制度を修了し、組合員となった一七二一年のことだった [Swift 1992, p.275]。

(26) 一六九五年一〇月二四日から一七三〇年二月にかけて週三回(火・木・土)発行された新聞。正式なタイトルは *The Post Man. And the historical account*. 主に外国の出来事を扱った [芝田一九九一、二七六頁]。

- (27) “To all Lovers of the Symphony. Francis Vaillant French Bookseller in the Strand near Catherine Street gives notice, that he is now printing the new Solos of Corelli in Score as well ingraven in every particular as the Roman original. [...] 『ポスト・マン』(一七〇〇年八月二四日—八月二七日) ”

- (28) ロジエによる再版は一七〇一年に行われた。
(29) 一六六五年創刊、週二回発行の新聞。主な内容はイングランド政府の活動と外国の出来事であった [芝田一九九一、二七四頁]。
(30) “The New Sonatas of the famous Signior Archangelo Corelli, curiously engraven on 70 Copper-Plates, and printed on a large Imperial Paper, being now brought

近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワーク（七條）

- from Rome, will be ready to be delivered to Subscribers on Monday next...”『ロンドン・ガゼット』（一七〇〇年七月八日）
- (31) “much fairer, and more correct in the Musick, than that of Amsterdam. ...”『ロンドン・ガゼット』（一七〇〇年八月一六日）
- (32) “Whereas it has been published in some News Papers, that 12 Sonata's or Solo's composed by Archangelo Corelli, [...] are to be sold at the sign of the Harp and Hautboy in Catherine Street, being fairer and more correct in the Musick, than that of Amsterdam, [...] the said Advertisement cannot be true, seeing the Amsterdam Edition is not yet published, and if any one will be at the pains to consider the only Specimen in England at Francis Vaillants Bookseller in the Strand, he will be convinced, that the reflection past upon the Amsterdam edition is but unjust and groundless [...]”『ホスト・マン』（一七〇〇年八月三十一日—九月三日）
- (33) イタリヤの作曲家アルビノーニの一二のコンチェルト、作品五。ヴェネツィアのザーラによる初版譜に基づく。ロジェが一七〇八年頃再版した。
- (34) “Whereas several Persons having bought the said Book of Albironi Counterfeited by Mortier at Amsterdam, and have found it to be so uncorrected that they have brought them to me to be exchang'd, I advertise that I sell the same for 3s.”『ライリー・クラウン』（一七〇八年一〇月一五日）同様の広告が一六日、一八日にも出された。

参考文献一覧

【図書館資料】

Amsterdam Stadsarchief, 201.10.6.4. Archief van de Waalsch Hervormde Gemeente, Arhief van de Consistoire van Diakenen. 2180B. Kopieregister van brieven van M. de Lorme – le Bret (1707-1708)

【定期刊行物】

Gazette d'Amsterdam

The Post Man

London Gazette

News

Daily Courant

【カタログ】（出版地、出版者が明記されていないものはすべてアムステルダムにおけるロジェ版。）

Recueil II 1696A: *Recueil d'airs sérieux et à boire... Livre second.*

De La Force 1696B: De La Force, Charlotte-Rose

Caumont. *Histoire Marguerite de Valois, Reine de*

Navarre, sœur de François I. Tome II.

La Martinière 1698F: La Martinière, Pierre-Martin de.

Nouveau voyage du Nort.

Della Faille 1699F: Della Faille, Jean-Baptiste. *L'idée parfaite du véritable héros*.
Catalogue des livres de musique, nouvellement imprimés à Amsterdam chez Estienne Roger. 1708.
Catalogue des livres de musique, et autres. Qui se vendent chez Christophe Ballard, seul Imprimeur du Roy pour la Musique, à Paris rue S. Jean de Beauvais, au Mont-Parnasse. Paris: Ballard, 1704.
Catalogue des livres de musique, et autres. Qui se vendent chez Christophe Ballard, seul Imprimeur du Roy pour la Musique, à Paris rue S. Jean de Beauvais, au Mont-Parnasse. Paris: Ballard, 1709.

【雑件・論文】
 Beer, Axel. 1997. "Musikverlage und Musikalienhandel," *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Zweite Auflage, Sachteil 6, pp. 1760-1783. Kassel: Bärenreiter.
 Berkvens-Stevelinck, Christiane. 1984/1990. "L'édition française en Hollande," *Histoire de l'édition française, Tom II, Le livre triomphant 1660-1830*. Roger Chartier & Henri-Jean Martin, eds., pp. 403-417. Paris: Promodis. Reprinted in Paris: Fayard/

Promodis.
 Boorman, Stanley, Elenor Selfridge-Field, Donald W. Krummel. 2001. "Printing & Publishing of Music," *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2nd ed., Vol. 20, pp. 326-281. London: Macmillan Publishers.
 Christmann, Mirjam. 2014. "Huguenot Material in London after the Edict of Fontainebleau: The Vaillant Family," *Material Moments in Book Cultures: Essays in Honour of Gabriele Müller-Oberhäuser*. Simon Rosenberg and Sandra Simon, eds., pp.189-210. Frankfurt am Main: Edition Peter Lang.
 Febvre, Lucien, Jean-Henri Martin, 1958/1999. *L'apparition du livre*. Paris: Albin Michel.
 Guillo, Laurent. 2005. "Legal Aspects," *Music Publishing in Europe 1600-1900, Concepts and Issues, Bibliography*. Rudolf Rasch, ed., pp. 115-138. Berlin: Berliner Wissenschafts-Verlag.
 Lesure François. 1969. *Bibliographie des Éditions musicales publiées par Estienne Roger et Michel-Charles Le Cène (Amsterdam, 1696-1743)*. Paris: Société Française de Musicologie.

- Mours, Samuel. 1967. *Le protestantisme en France au XVII^e siècle (1598 – 1685)*. Paris: Librairie Protestante.
- Nusteling, Hubert P. 1986. "The Netherlands and the Huguenot émigrés," *La Révocation de l'Édit de Nantes et les Provinces-Unies 1685, Colloque international du tricentenaire Leyde, 1985 avril 1 – 3*. pp. 17-34. Amsterdam & Maarssen: APA – Holland University Press.
- Pincherle, Marc. 1946-47. "Note sur Estienne Roger et Michel-Charles Le Cène," *Revue Belge de Musicologie*, 1, pp. 82-92.
- Rasch, Rudolf. 1995. "Estienne Roger and John Walsh: Patterns of Competition between Early-18th-century Dutch and English Music Publishing," *The North Sea and Culture (1550-1800)*. Juliette Roding and Lex Heerma van Voss, eds., pp. 396-407. Hilversum: Verloren.
- 1998. "Brossard, Ballard et Roger," *Sébastien de Brossard musicien*. Jean Duron, ed., pp. 239-259. Versailles: Édition du Centre de musique baroque de Versail
- Scoville, Warren C. 1960. *The Persecution of Huguenots and French Economic Development 1680 – 1720*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Smith, William C. 1948. *A Bibliography of the Musical Works Published by John Walsh during the Years 1695-1720*. London: Bibliographical Society.
- Swift, Katherine. 1992. "Dutch Penetration of the London Market for Books, c. 1690-1730," *Le magasin de lunivers: the Dutch Republic as the Centre of the European Book Trade, Papers Presented at the International Colloquium, held at Wassenaar, 5-7 July 1990*. pp.267-279. Leiden: E. J. Brill.
- Van Eeghen, I. H. 1960-1978. *De Amsterdamse Boekhandel 1680-1725*. 5 Vols. Amsterdam: Scheltema & Holkema.
- ウォーラー・ステイン、イマヌエル 二〇一三 『近代世界システム』一六〇〇—一七五〇 重商主義と「ヨーロッパ」世界経済の凝集『川北稔訳「名古屋大学出版会」』
- 金哲雄 一九九四 「オランダにおけるユグノーの経済活動」『大阪経済法科大学論集』五五（二）一〇一—一二二頁。
- 二〇一三 「オランダのユグノー印刷・出版業と

『文芸共和国』 『大阪経済法科大学論集』 三七(一)、
一一二二頁。

芝田正夫 一九九一 「一八世紀初期におけるイギリス新
聞の研究(一)——特許法の廃止と独立新聞・地方紙
の出現」 『関西学院大学社会学部紀要』(六四)、二六九
—二八五頁。

七條めぐみ 二〇一七 『アムステルダムにおけるリュリの
オペラの組曲版——楽譜出版者エティエンヌ・ロジェ
(一六六五/六六—一七二二) に関する歴史、文献、
音楽面からの研究——』 (愛知県立芸術大学大学院音
楽研究科博士学位論文)。

杉浦未樹 二〇〇〇 「一七世紀におけるアムステルダム
の移入民の出身地域と職業参入——婚姻登録簿の分
析を中心に」 『土地制度史学』四二(四)、五〇—六一頁。
— 二〇〇二 「アムステルダム貿易商人の内部構
成——商人の移動と定住とその基盤」 『近代ヨーロッ
パの探究九——国際商業』 望田幸男、村岡健次監修、
五一—七七頁、ミネルヴァ書房。
西川杉子 二〇〇二 「プロテスタント・ネットワークの
なかのイギリス」 『長い一八世紀のイギリス その政
治社会』 近藤和彦編、一一五—一四九頁、山川出版社。
— 二〇〇六 「イングランド国教会はカトリック

史苑(第七七卷第二号)

である——一七、一八世紀のプロテスタント・インタ
ナショナルと寛容問題」 『信仰と他者——寛容と不寛
容のヨーロッパ』 宗教社会史』 深沢克己、高山博編、
一四五—一八二頁、東京大学出版会。

二宮素子 一九八二 「フランス絶対王政下の書物と検閲」
『一橋大学社会科学古典資料センター Study Series』
二、一—二五頁。

フェーヴル、リュシアン、アンリルジャン・マルタン
一九八五 『書物の出現(上・下)』 関根素子ほか訳、
筑摩書房。

フェザー、ジョン 一九九一 『イギリス出版史』 箕輪成
男訳、玉川大学出版部。

深沢克己 一九九九 「ヨーロッパ商業空間とディアスポ
ラ」 『岩波講座 世界歴史一五——商人と市場 ネット
ワークの中の国家』 一八一—二〇七頁、岩波書店。

箕輪成男 二〇一一 『近代「出版者」の誕生——西欧文
明の知的装置』 出版ニュース社。

ムール、サミュエル 一九九〇 『危機のユグノー——一七
世紀フランスのプロテスタント』 佐野泰雄訳、教文館。
(愛知県立芸術大学大学院博士後期課程ノ
パリソルボンヌ大学博士課程)

**The Huguenots' network in the early modern Dutch publishing industry:
a new perspective through the book and music publishing of Estienne Roger (1665/66 – 1722)**

SHICHIJO, Megumi

In the publishing industry in 17th century Europe, the Netherlands enjoyed an incomparable prosperity beyond other countries that were exhausted by the wars. In general, the economic development and the acceptance of Protestant intellectuals and publishers because of religious affinity have been generally considered as the reasons for the growth of the book trade. However, it does not sufficiently explain what kind of conditions operated on Dutch publishers. Otherwise, music publishing has also developed in the Netherlands, while its reason remains unclear, except for the precocious introduction of engraving technology. It is for this reason, this paper deals with the social conditions which book and music publishers in the Netherlands shared, focusing especially on the international network of Huguenots.

In order to deal with this issue, we examine the activity of a publisher in Amsterdam, Estienne Roger, famous provider of Italian instrumental music around 1700. Being a Huguenot refugee, he also worked as a bookseller. Although this aspect has not been sufficiently emphasized so far, his origin as a Huguenot bookseller must have influenced his publications, considering the significance of Huguenots in Europe in the early modern period. It will therefore be necessary to question the relationship between his origins and his publications, studying the international network of Huguenots and the knowhow of the booksellers that Roger could acquire.

The analysis of the relationship between Roger and his surroundings clarifies how he profited from the booksellers' network. First, he connected several Parisian booksellers and exchanged their publications, in collaboration with his associate, Jean- Louis De Lorme. Second, his agents in London, the Vaillant brothers, themselves Huguenots, advertised Roger's music publishing in English newspapers, to compete with Roger's rival music publisher. Thus, connection with Huguenots and application of the knowhow of booksellers to musical publishing enabled him to realize the extensive market model in his publishing. Through the case study of Roger, it can be said that the Huguenots' network played an important role in the Dutch publication culture.

近世オランダの出版業におけるユグノーのネットワーク (七條)